

2025.11  
(公社)富山県薬剤師会  
広報誌

# とくやく 富薬

11号  
第47卷  
No.436



センブリ *Swertia japonica* Makino (リンドウ科 *Gentianaceae*)



生薬 トウヤク（当薬）

**生薬** トウヤク（当薬） 秋の開花期に全草を採取し、速やかに陰乾する。

**成 分** 苦味配糖体: swertiamarin, sweroside, gentiopicroside, amaroswerin, amarogentin、キサントン誘導体: swertianin, norswertianin, swertianolin, bellidifolin、フラボノイド: swertisin, swertiajaponin, homoorientin, isovitexin、トリテルペノイド: oleanolic acid 等。

**効能** 苦味健胃薬として胃腸虚弱、消化不良、食欲不振、胃痛、腹痛、下痢などに服用する。発毛効果があり育毛剤に配合される。苦味チンキの原料。

元富山県薬事研究所  
薬用植物指導センター

村上守一氏 写真撮影

## ○○表紙について○○



北海道から九州および朝鮮、中国の日当たりの良い丘陵地や低山の草地に自生する小型の二年生草本ですが、最近では開発などによる草地の減少や放棄地による雑草地の増加などで、生育地を追われ、いくつかの都府県で準絶滅危惧(NT)、絶滅危惧Ⅱ類(VU)に指定されています。野生採取が期待できないため1970年代に長野県の野菜花き試験場で栽培が始まり、2000年には30tも生産されるようになりました。草丈は20-25cmで、1年目の生育は緩慢で、発芽した芽から小形で倒披針形の根生葉を10枚程度出すだけで冬を越し、2年目になって茎が立ち上がります。茎は基部から分枝、または単立する4稜形で通常帶紫色を帯びています。茎葉は1-3cmほど細長い線形で幅は約2mm、無柄で対生します。花期は10-11月で、分かれた枝先に円錐状の花序をつくり、上向きに5弁の白い花を咲かせます。花冠は深く5裂し、花弁は長卵形、縦に淡紫色の脈が5本入ります。蒴果は花冠より少し長く、種子はやや円い。根は分岐し黄色を帯びます。

花、葉、茎、根の全草のすべてが極めて苦く、熱湯に浸して、千回振っても、まだ苦味は残るとか、あまりの苦さに千回身震いするからなど色々言われているようです。また苦い薬の代名詞のように使われるところから「當に薬である」の和製漢字「當薬」と書くようになったとも言われています。ことわざの「良薬口に苦し」もセンブリに当てはまる言葉としてよく使われますが、魏の王肅(195-256)が著したと言われる『孔子家語・六本』に「孔子曰、良薬口に苦けれども、病に利あり。忠言耳に逆へども、行ふに利あり」と苦味や忠言は舌や耳につらくあたるけれど、実際は病や行いを利するという人の生き方を諭す言葉で、元々センブリの苦さとは関係の無い言葉です。

和薬の代表的な生薬ですが、利用は比較的新しく江戸時代に入ってからではないかと推測されています。江戸初期の本草書『本草弁疑』(1681)には「當薬一名センブリ葉紫、花白き小草なり。山野に多し。其の味苦し。諸虫を治し腹痛を止る。古より胡黄連 (*Picrorhiz kurroa*) の代用之を用ゆ。甚だ誤り也。形も味も異なる者なり。但し唐書の諸方に合するには唐の胡黄連を用い、腹痛の和方に合するには此の當薬を用ゆへきなり」と、始めて腹痛の薬であることが記されています。次に腹痛薬として明記されているのは『草木図説』(1856)で「味大に苦し。一種濁大葉の品あり。共に邦人採りて腹痛を治し。又よく虫を殺す」腹痛と殺虫薬としての用途が記されています。

江戸後期になって蘭学など西洋医学の知識が入り苦味健胃薬の考えが定着すると始めて認められていきます。第二改正日本薬局方(1891)には龍胆の代用品として記載され、第四改正日本薬局方(1920)では正式に収載され、「Herba Swertiae.當薬 *Swertia japonica* Makino. *Swertia chinensis* Hemsl.」の2種が挙げられています。1種はセンブリですが、文章中に「花冠は白色又は漸次褪消する紫色を有し」とあるところからもう1種はムラサキセンブリ (*S.pseudochinemensis*) ではないかと思われます。苦味成分のswertiamarinは含有しているため苦味は感じますが、強苦味成分のamaroswerinとamarogentinは含まないため、苦味が弱く市場性も少ないとから『第六改正日本薬局方』(1951)から削除されました。他に同属植物に北海道・本州から九州、朝鮮、中国に自生するイヌセンブリ (*S.tosaensis*) も苦味ほとんど感じない程で薬としては用いません。またインドのアユルベーダ医学では苦味健胃薬としてチレッタ草 (*S.chirayita*) を使いますし、チベットでも *S.racemosa* や *S.nervosa* などが薬として使われています。

(村上守一 記)